続・維摩経研究の一面

高崎正芳

㈠鳩摩羅什訳「維摩詰所説経」の仏国品第一、（支謙訳・仏国品第一。玄奘訳・序品第一。法性戒・チベット訳・仏国土が清浄にされる由因の章第一）の始めの方の記述に、数多くの菩薩の名をあげているところがある。「注維摩詰経」では、什訳のそれら菩薩達の各の殆どに関する、什自身の注釈が伝えられている。こうした事については既に論じた事があるが、今回は更に新たに注意される事柄について考察を進めることにする。

什訳経本文における菩薩達の、前から四十三番目に「観世菩薩」という菩薩の名がある。支謙訳では「闚音菩薩」となっており、玄奘訳では「観自在菩薩」と記されている。「観世音」や「観自在」等の訳語表現及び内容などについては、古くからあれこれの見解学説がある。什訳の「妙法蓮華経・観音普門品」。法蔵の「観音経類解」「西域記」第三。「慈恩伝」第二。「玄応音義」「釈迦方志」あるいは慧沼の「金光明最勝王経疏」その他の見解説明がある。また近代の学者による諸説もあり、そして仏教辞典類にも「観世音」「観自在」等の訳語をめぐって各にまとめられている。なお最近には佐保田鶴治博士が「般若心経の真実」という著作の中で、この問題について考究し独自の説を示されている。以上に述べた事やその他のものの諸の見解・学説等の一々を、今ここで紹介する事は紙面の都合上省略しなければならない。ただ「維摩経」をめぐる資料記述によって、「観世音」とか「観自在」ほかの訳語の様相を考察しようとするのが本論述の主旨であるから、それには、必要なかぎりにおいて、前述の見解・学説のいくつかを採り用いながら記述を進める事にする。

㈡玄奘の「西域記」第三に「観自在」について「旧訳ニハ光或ハ世音、或ハ観世音、或ハ観世自在ト為ス皆訛謬也」という記述がある。また「慈恩伝」第二には「阿縛盧枳多伊湿代羅ハ唐ニハ観自在ト云ウ。合字連声ノ梵語ヲ、上ノ如ク文ヲ分ケテ言エバ即チ阿縛盧枳多ハ訳シテ観ト曰ウ。伊湿伐羅ハ訳シテ自在ト曰ウ。旧ニハ光世音、或ハ観世音、或ハ観世音

自在ト云ウ、皆訛也」と述べている。「西域記」によると、旧訳の例をあげ、それらは皆訛謬であるといい。「慈恩伝」によれば、合字連声の梵語（avalokiteśvara）を分けていうと avalokita は観といい、īśvara は自在という、そして旧訳の光世音・観世音・観世音自在などは皆、原語の訛である。と解している。近代になって見出されたサンスクリット原典（法華経・般若心経等）の多くが、“avalokiteśvara”という語を示しており、漢訳では什訳の「妙法蓮華経」が「観世音」という訳語を用い、玄奘訳の「般若心経」が「観自在」という訳語を用いている、といった様な事から、学者間での諸説が論じられている。そして、諸説を大別すると、まず原語を“avalokiteśvara” avalokita-īśvara に設定して、「観世音」等と「観自在」の訳語の新・旧や当・不当を論ずる部類の説がある。もう一つは、西域本の「法華経」原典に“avalokita-svara”が用いられている例があり、それからすれば「観音」或は「観世音」等という旧訳の根拠がここに見出されると共に、この原語の方が古く存在したのではなかろうかとさえ考えられている説とがある。前者の諸説論義は、「西域記」や「慈恩伝」ほかの記述の影響による面があるようで、しかも avalokita-īśvara のみを原語として見た場合の論義といえる。ところが、更に「西域記」が「訛謬」といい、「慈恩伝」が「訛」であると記している点をよく考えてみる必要がある。それらの記述を単に、あやまり、という意味に解してしまわずに、それを、なまり、と解釈するのがよいのではないかと考えられる。中国に伝えられた原典には「訛」（なまり）をもった言語を含むものも多かったようである。原典が筆写記録された時や人や場所等による用語の特色は、各々の面で論じられるが、中でも漢訳仏典の音写語が色々な形で記されている事実は、一つの例である。前述後者の原語“avalokita-svara”の場合も、広義でのなまりに関係するものと見る事ができる。またこうした観点に立てば、なまりといわれる語形と、“avalokiteśvara”の語形との双方の存在を承認する事も吝ではない。

㈢さて次に「維摩経」漢訳三本、チベット訳、「注維摩詰経」等を中心として考察を進めて行く。漢訳三本が各「闕音」「観世音」「観自在」という訳語を示している事は既に関説した。そして漢訳のこうした表現と原語との関係の解釈についても、色々な見解学説等をふまえながら、よりよい解釈の方向を述べて来た。「維摩経」漢訳三本の訳語においても同様の事が考えられるが、他方チベット訳や「注維摩詰経」によっての考察を加えて以下に述べてみたい。法性戒のチベット訳では“spyan ras gzigs kyi dbaṅ phyug”と訳されている語があり、それはマハービュットパティ等によると、サンスクリットの“avalokiteśvara”に対応するものとなってい

る。またラモーット教授の「維摩経」の研究書 "L'Enseignement de Vimalakīrti" を見ると、やはり "avalokiteśvara" があてられている。一方チベット語自体の意味についていえば、spyan ras は mig と同じでもあるが、しかし単なる目・眼というものではなく、透徹観測という意味をもった語であり、gzigs は観・看・見の意味をもっている。そして次の dbaṅ phyug は自在とか勢力などの意味を有する語である。これらの意味をもつ用語の全体の意味としては、透徹観測観の自在な（もの）という事になる。チベット訳は "avalokiteśvara" をこの様に理解したわけである。その理解は漢訳の「観世自在」とか「観自在」という訳語の意味に近いといえる。「注維摩詰経」では「観世音菩薩。什曰ク、世ニ危難有リテ名ヲ称テ自ラ帰スレバ、菩薩其ノ音声ヲ観ジ即チ解脱ヲ得ル也。亦観世念ト名ヅケ、亦観自在ト名ヅクル也」と記されている。その中、「世ニ危難有リテ—中略—即チ解脱ヲ得ル也」という什の解釈説明の部分は、什訳「妙法蓮華経」普門品の「一心ニ観世音菩薩ノ名ヲ称レバ、即時ニ其ノ音声ヲ観ジ、皆解脱ヲ得ル」と同じ意味の事柄を述べたものである事がわかる。ただ「法華経」の梵本には「即時ニ其ノ音声ヲ観ジ」に当たる文句がない、だから漢訳のこのところは多分、訳者鳩摩羅什によって付加されたのであろうと見られている。おそらくそれはそうであろうが、「法華経」と同じ様な文句が「注維摩詰経」に「什曰ク」として記されているという事は、什の訳した「観世音」の語及びその菩薩の働きについて、什自身、一つの見識をもっていたと考えられる。したがってその立場から、「法華経」経文の付加がなされ、「注維摩詰経」の解説があたえられたのであろう。なお「法華経」西域本の用語例からして「観音」或は「観世音」という漢訳が、あやまりでない事は既に述べた。また法蔵の「観音経類解」には「世音トハ十界三世間ナリ、音トハ十界善恵ノ音声ナリ」といった説明がなされている。更にまた、玄奘以後の漢訳者によっても「観世音」という訳語が用いられている。不空訳の経名「大慈大悲救苦観世音自在王菩薩広大円満無疑自在青頸大悲心陀羅尼」などがその一例である。次に「注維摩詰経」の「亦観世念ト名」づけるという説明についてであるが、現在のところこの事の適切な原語の用例による解釈は見出し得ないでいる。ただ īśvara には、〜し得る、〜する能力ある、という意味があるので、これによって、人の内的心念を観ずる能力あるものという様に解するならば、一応「観世念」の意味を会通し得る事になる。こうした意味上の解釈は、後に示す様に慧沼の「金光明最勝王経疏」の中で、これを行っている。また次に「注維摩詰経」の「亦観自在ト名ヅクル也」について考えてみる。「大正大蔵経」の注記によると、底本は「観自在」であるが、異本には「観世自在」

となっているのもある事が示されている。今は「大正大蔵経」の本文に従うが、実際上は、どちらであっても用語としては同類形に属するものであり、その事は既にチベット訳を考究したところでも述べて来た。そしてその語の原語はこの場合も avalokitesvara であろうことはほとんど間違いないであろう。そういう事からすれば、什は自らの訳語「観世音」に対して、「観自在」という語のある事をもよく知っていたわけである。それにもかかわらず本文の訳語を「観世音」としたのはどうしてなのであろうか。その理由としては、什訳「維摩詰経」の原語がそうであったとも考えられ、更に支謙訳の「闚音」（闚は、うかがい観るの意）や他の先訳語を考慮して、「観世音」としたといえる。ここで前記した、慧沼の「金光明最勝王経疏」第五の記述について述べてみる。「梵ニハ、阿縛盧枳帝湿筏邏耶ト云ウ、阿縛盧枳帝ハ此ニ観ト云ウ、余ハ自在ト云ウ、天眼・耳及ビ他心通ヲ以テ、恒ニ世間ヲ観ジ随ツテ皆能ク救ウヲ観自在ト云ウ、観世音ト云ウハ一説ニ従ウ也、其名具ナラズ正翻ニ非ザル也」とある。その中、終りの方の「其名具ナラズ正翻ニ非ザル也」に関しては、今日既に西域本の“avalokita-svara”の語形が認められているので、慧沼の説は当を得ていない事になる。しかしながら天眼通、天耳通、他心通をもって恒に世間を観じ随って、皆能く救う働きのあるのを観自在という、とする意味の解釈には、注目すべき点がある。天眼通・天耳通・他心通等は、阿羅漢や菩薩の具有する三明六通にかかわる徳目・働きであるが、それによって世間を観じ無礙自在な妙用がなされるわけである。慧沼はそうしたことをもって「観自在」の説明をしている。ところで、この天眼・天耳・他心等の働きによる解釈を、「維摩結経」及び「注維摩詰経」における什の言語と対応して考えてみるとどうであろうか。「観世音」や「菩薩其ノ声ヲ観」察するというのを「天耳通」に、「観世念」を「他心通」に、そして「観自在」を「天眼通」に配してみる事が出来るであろう。ただ「観世念」の原語的考察は未審である。そうではあるが、対応する各の働きの内的な意味はよく通じている。なおこのことについては、慧沼の解釈を什の言語に当てはめるというよりは、むしろ什自らは「法華経」や「維摩経」の訳文或は注記において、既に菩薩の通力の教義的内容の説明を行っており、その事を考慮した上で「観世音」に対する「注維摩詰経」の説明を述べたといえる。そのところを一応感得した慧沼が、三通名をあげ独自の考えによって三通を「観自在」の説明に当てたのかも知れないが、この方にはなお疑問の残る点もある。（注略）

（昭和五十六年度・科学研究費（一般C）による研究成果の一部）

（花園大学教授）